

新たな公害 PFAS ~千葉県の現状~

ピーファス ピーフォス ピーフオア
PFASはPFOS/PFOAなどの有機フッ素化合物の総称です。油、汚れ、水を良くはじき、熱に強いため、消火剤やフライパンのコーティング剤などに使われてきました。しかし、ほとんど分解されずに体内に蓄積されるなど、大変厄介な物質です。最新の研究では、がんなどの健康被害との関連が指摘され、世界的に大変問題になっています。

日本の基準値がない！

現在、日本では、公共用水域及び地下水、また水道水の暫定指針値を、PFOSとPFOAの合計で1リットルあたり50ナノグラム(ng/L)と設定しています。しかし、あくまでも「暫定の指針値」であり、水質基準項目には入っていません。そのため、PFAS濃度の測定や対策は義務付けられておらず、自治体の判断で調査・対応しています。

日本のPFAS汚染

沖縄の米軍基地で泡消火剤に含まれているPFASが基地の外に流出し、環境汚染を引き起こしました。また、福生市にある米軍横田基地から5回以上の漏出があり、周辺住民への健康被害が心配されています。基地が汚染源となっている可能性が極めて高い状況です。

市民団体が昨年から今年にかけて、東京都多摩地

石木ダム建設抗議の声を届けてください

川原の住民の必死の抵抗、抗議の声にも耳をかさず、長崎県と佐世保市は、田んぼを土砂で埋め、水路を破壊し強制収用地内での工事に着手した。

いよいよ行政代執行手続きも目前に迫っています。憤りと悔しさのなか、それでも住民の方々は、諦めずに抗議の座り込みを続けています。生まれ育った土地に住み続けたい、自然の宝庫を守り、愛し、当たり前の暮らしをしたいだけなのに、必要のないダ

区650人の血液検査を実施したところ、横田基地周辺の住民から高濃度のPFASが検出され、新聞でも大きく報道されました。

千葉県では

2020年から水道水のPFOS・PFOAを測定しています。2021年度の最高値は柏井浄水場の原水で、30ng/Lでした。粒状活性炭処理で数値を1桁に下げ、飲み水として提供しています（下表）。

また、河川・湖沼での水質測定を2021年から行っており、白井市の金山落で270ng/L、千葉市葭川で57ng/Lと、2か所で暫定指針値を超過しました。いずれも数値が高い原因は不明のこと。

今後しっかりと取り組むよう、千葉県に提案していきます。

出典：2021年度
千葉県水質年報

PFOS/PFOAの数値(ナノグラム/L)

千葉県内浄水場 2021年度	最高	最低	平均
野菊の里 原水(江戸川)	9	2	6
配水池	7	3	5
東山 二重浄水	6	2	4
柏井 原水(印旛沼)	30	22	26
東側浄水	4	1	2
西側浄水	7	2	4
北郷 原水(利根川)	13	7	9
浄水場	7	2	4
福井 原水(高瀬ダム)	12	9	10
中間ポンプ井	10	4	7
配水池	7	5	6

(中台ヒデ子)

WATER & THE YANBA

vol. 37

CONTENTS

- ダムより流域治水 武笠紀子
- 第20回総会について
- 流域治水シンポジウムの報告 大野博美
- 八ッ場ダム「3年ぶりの現地見学会」 渡辺洋子
- 新たな公害PFAS ~千葉県の現状~ 川口絵未
- 石木ダム建設抗議の声を 中台ヒデ子
- 編集後記 松島 梢

編集：猪俣悦子

水問題と八ッ場ダムを考える千葉の会

代表：武笠紀子・大野博美
住所：〒270-0007 松戸市中金杉4-71-2
TEL：090-9365-9608 (武笠)
WEB：「水問題と八ッ場ダムを考える千葉の会」
で検索してください。
2023年7月13日発行

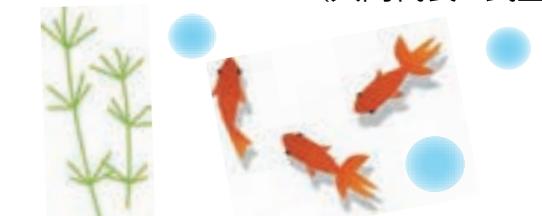
ダムより流域治水

梅雨明け前の豪雨が、これまでと違う様相を示し、線状降水帯の発生による水害が、熊本を始めとして各地で頻発し、これまでのようなダムに頼った治水ではなく、新たな治水対策が求められています。

先日のウクライナでのダム破壊には驚きました。日本でも、東日本大地震の際に、藤沼ダムが壊れて8名の死者を出す被害が起きましたが、ひとたび、ダムが壊れると甚大な被害をもたらすという事実を再確認しました。

1都5県での10年間の活動でも、ハッ場ダム建設は止められませんでしたが、状況が変わった今、石木ダム(長崎県)、南摩ダム(栃木県)、霞ヶ浦導水(茨城県・千葉県)など、これ以上のダム建設の中止を求めるとともに、流域治水を提言していきたいと思います。

(共同代表 武笠紀子)



第20回総会について

第20回総会開催にあたり、今回も書面での議決とします。同封のハガキに記入の上、ご返送ください。

●会費納入のお願い

(一口 1000円/年)
会費振込先：00120-5-426489
*会計年度は1月から12月末まで

オンライン講演会

「PFASが水を汚す」

日時：8月5日(土)10:00～12:00

講師：植田武智さん(科学ジャーナリスト)

週刊金曜日の特集記事で大反響。東京、千葉など関東6県の水道水のPFAS汚染を調査して警鐘を鳴らしている。

参加費：無料

申込フォーム →



編集後記

大人の社会科見学 浄水場に行ってきました

浄水場は安全上の理由から通常は入れないので、貴重な機会です。佐倉市にある3か所の浄水場のうち、住宅街の奥にある上座浄水場が今回の見学地です。水道水を飲むことができるのは、世界で日本を含め9か国しかないです。蛇口をひねれば安全な水ができるのは当たり前ではないのだ実感しました。深井戸や配水ポンプなど説明を受けながら見学。原水の安全性を確認するために飼育されている金魚も見

てきました。

千葉県はハッ場ダムや霞ヶ浦導水を進めるために、揚水戸を段階的に閉じようとしていますが、災害時の備えとして井戸の必要性も言及しており、矛盾しています。地下水を守り、井戸は閉じるべきでないとアンケートに記入してきました。最後にできたての生水を試飲し、帰路につきました。

(松島 梢)

流域治水シンポジウム in 船橋

5月27日、船橋市で「流域治水シンポジウム」が開かれた。基調講演は元滋賀県知事の嘉田由紀子さん（現参議院議員）。これは行かねば！

メディカルタウン構想

主催者の「流域治水の会船橋」は、船橋市内を流れる海老川水系を洪水から守る活動をしている。

海老川水系上流では、「メディカルタウン構想」なる、病院を中心とした一大区画整理事業が計画されている。しかしこの計画は、いわば海老川上流部をコンクリートで蓋をすることになり、深刻な洪水被害を起こす可能性があるのだ。（右図参照）

川と共生する治水の仕組み

日本では、長らく「川を掘削し堤防を嵩上げ。水は川に封じ込める」と言う洪水対策が行われてきた。

これを画期的に変えたのが、嘉田さんが滋賀県知事時代に策定した「流域治水条例」だ。川を力づけて抑え込むのではなく、川と共生しながら、水を「ためる」「ながす」「とどめる」「そなえる」という治水の仕組みを滋賀県で作り上げた。

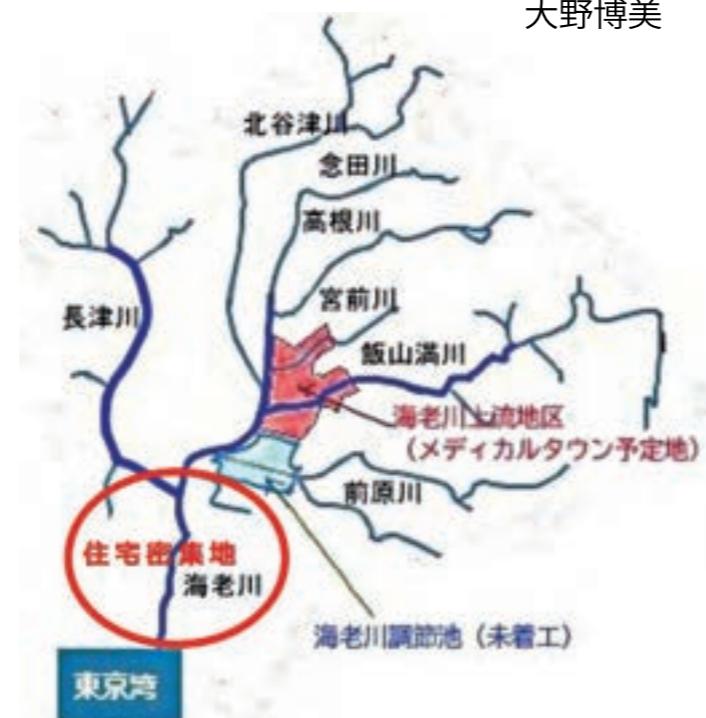
嘉田さんは、講演の中で、船橋市のような都市化が進む人口密集地では、街中に水を「ためる」遊水地を確保することが重要だと強調した。

実は船橋市では、40年も前に、遊水地など流域治水を先取りした取り組みが行われていた。



長津川の調節池

昭和の高度成長期、急激に都市化が進む船橋では、保水力のある森林山野が激減し、豪雨が降るたびに海老川が氾濫、大きな浸水被害が起きていた。この対策として打ち出されたのが海老川支流の長津川の整備事業であり、河川改修と共に全国最初の調節池が造られた。調節池は大量の雨水をしっかりと



大野博美

溜め、これ以降、船橋の浸水被害は大幅に減った。

しかし、図の東側を見ていただきたい。たくさんの支流が集まる赤い箇所は現在遊休農地であり、遊水地の役割を果たしている。ここをコンクリートで固めてしまうということは、行場を失った水が一気に海老川へと押し寄せ、下流域の氾濫につながる。

長津川で示された船橋市の観察はいざこへ…

千葉県と「流域治水」

このシンポジウムでは、「千葉県の取り組み」と題して、千葉県河川整備課長が登壇。

私は課長の顔を見て驚いた。前県議の伊藤とし子が「千葉県にも流域治水条例を！」という質問をしたときに、事前ヒアリングで散々やりあった御仁ではないか。「滋賀県と千葉県では事情が違います！」と、私たちとは真っ向から対立していた。

ところが最後のヒアリングの際、会うなり「先生、今や『ながす、ためる、とどめる、そなえる』なんですよ」と、どや顔… まさに「流域治水」のキャッチコピー！ 伊藤さんも私も椅子から転げ落ちそうになった。なぜ急に風向きが変わったのかは今でも謎だが、ともかくこれは嬉しい急変だった。

今千葉県では、甚大な氾濫被害を出した一宮川の治水対策に、「流域治水」という言葉を初めて使って工事を進めている。嘉田さんの提唱が少しずつ都道府県を動かしている。私たちも声をあげ、この動きを船橋など基礎自治体にも根付かせていくたい。

八ッ場ダム「3年ぶりの現地見学会」

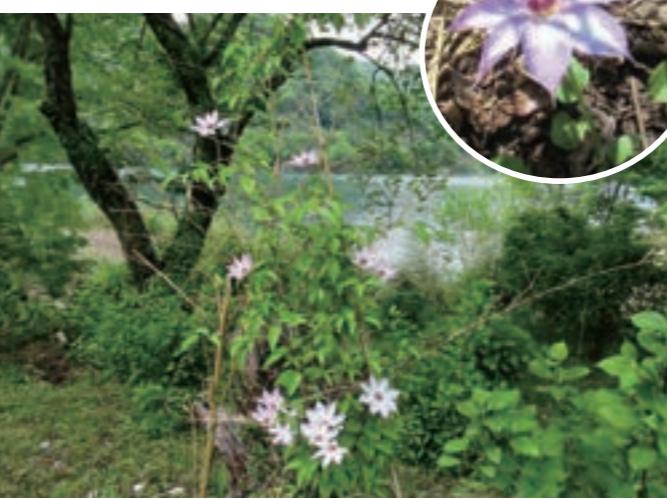
八ッ場あしたの会事務局 渡辺洋子

八ッ場ダムが完成し、かつてのようにマスコミが「八ッ場」を取り上げることはなくなりましたが、自然破壊、地域の衰退などダムが引き起こす問題は続いています。

八ッ場あしたの会では4月29日、コロナ禍で中断していた現地見学会を久しぶりに開きました。2020年3月にダムは完成しましたが、コロナ感染拡大のため、竣工式はなしという異例の船出でした。4月には東京オリンピックの聖火リレーがやってくる予定でしたが、それも1年後に延期されました。この間、観光にたびたびブレーキがかかったものの、ダム湖では水陸両用バスが運行を始め、ダム湖の周囲には、利根川流域都県がダム事業で整備した地域振興施設が次々とオープンしました。

これまでの見学会はバスで周遊しましたが、今回はパンデミックの終息が見えない中、すべて野外で説明、移動は徒歩で行いました。集合場所は無人駅になったJR川原湯温泉駅です。乗降客が激減し、特急列車は2017年から停車していません。昨秋、東京発のJRバス「上州ゆめぐり号」の停留所が駅前に10年ぶりに復活しました。

駅に隣接する新しい建物は「川原湯温泉あそびの基地NOA」です。22億9000万円の整備費をかけ、温泉施設やクラフトビールの醸造所ができ、グランピングと呼ばれる設備の整ったキャンプ場が併設されましたが、集客は今一つです。地域振興施設の本来の目的は住民の雇用のはずですが、施設の運営は東京の会社にゆだねられています。今後の維持管理は地元負担となるだけに、先行きが心配な状況です。



カザグルマ。シーボルトなどが欧州に持ち帰り、クレマティスへと品種改良されました。



ダム直下の吾妻峡

キャンプ場の脇の橋を渡って駅の裏手に回ると、ダム湖が目の前です。湖岸の梅林には山野草が咲いていました。地元の方のご厚意で案内していただくと、水没地から移植された貴重なカザグルマが梅の切り株にからんで、勢よく蔓を伸ばしていました。

湖岸沿いに道をたどると、水没した温泉源の跡が「源泉公園」となっており、旧温泉街の跡には水に浸かった木々が立ち枯れています。ダム堤への途上、通り過ぎた川原湯温泉は、ゴールデンウイークだというのに閑散としていました。

ダム堤のエレベーターを降りると、巨大なコンクリートの壁に対峙するように、名勝・吾妻峡の岩山（新蓬萊）が聳えています。ダム直下の右岸側（川原湯地区）には、渓谷の遊歩道や「栄洞の滝」の跡が見え、岩の割れ目から流れた水で岩壁が濡れています。左岸（川原畠地区）の岸壁は酸性熱水変質帶で赤茶けていました。

帰路は川原畠地区の代替地を歩き、八ッ場大橋（湖面橋）を渡って川原湯に戻りました。川原湯も川原畠も水没住民の移転代替地は、沢を埋め山を削る大規模な地形改変によって造成されました。谷埋め盛り土には地盤の変動を観測する機器が設置されましたが、ダム湖の水位変動や歳月の経過がどう影響していくのでしょうか。

あしたの会では情報公開請求によって国交省の観測体制を監視する活動や、山野草の保全をサポートする活動を行っています。今回の見学会では、現場を歩くことでダム問題をより身近に感じていただけたのではないかと思います。